

平成21年6月12日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19510271
 研究課題名（和文） 暴力と主体構築の研究
 — 性的差異の行方
 研究課題名（英文） A Study on Violence and Self-Formation:
 The Future of Sexual Differences
 研究代表者
 竹村 和子 (TAKEMURA KAZUKO)
 お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授
 研究者番号：10155046

研究成果の概要：生政治の先鋭化したかたちと思われる現在のグローバル・レベルの監視社会のなかで、主体化/隷属化の図式が、他者殺傷を介しての自己殺傷となって現れ、殺傷を軸に、新たな(非)自己形成の物語が浮上しつつある。この新しい(非)自己の有り様から出現してくる、従来とは異なった暴力の布置は、旧来のジェンダー体制を利用しつつ、ジェンダー体制を崩して、別の差別化へと変容させていく。その戦略の巧妙な操作について批判的視点を保持することは、ジェンダー研究の視点と、暴力に関する理論的アプローチの両方から、文化表象を分析する必要があり、それを試みていった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野： ジェンダー、英語・英米文学

科研費の分科・細目： ジェンダー

キーワード： 暴力、性的差異、主体、ジェンダー、批評理論

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究は、近年、国際的および国内的に従来とは異なった規模で、また異なった様相で発露している「暴力」について、それと「主体構築」との関係、性的差異との連動性の有無も含めて抜本的に再考しようとするものである。

(2)本研究は、応募者がこれまで「親密圏/公共圏」の次元で近代主体の構築を研究してきた成果、および近代の性配置の理論化と、その表象分析に関して研究成果を発信してきたことの延長線上にある。

(3)本テーマは、世界的に未だまとまった研究がなされておらず、また、このような視点も明確に規定されていない。

①批評理論においては、民主主義的な近代主体のなかにも暴力が埋め込まれ、それが帝国主義と近代の性差別の枠組のなかで、巧妙に正当化されていることは論じられても、もはや一国内で終始しないグローバルな帝国主義、および性配置の部分的な改変にもなっており、暴力がどのように政治的・日常的に跋扈してくるようになってきたかについては、それについて焦点化した研究はなされてはいない。

②しかしアルグレイブ収容所における女性兵士がおこなったイラク人男囚に対する拷問、また家庭内や学校や公共空間で頻発する殺害や自殺やいじめ、さらには現代的な鬱病の増加や若者の身体認識の変化とともに加速する自殺率や自傷行為などは、現象的な社会分析のみならず、自己がどのようなかたちで生成し、主体としての位置を獲得して、自己の身体を認識するかということについての新しい枠組の必要性を示唆している。

(4)本研究は、このテーマでの研究の端緒を位置づけられるもので、その成果をもとに、グローバル化をふまえて、文化的多様性のなかでの主体構築と暴力の問題に取り組んでいく予定にしている。

2. 研究の目的

(1)本研究では、過去の研究結果をもとに、フーコー/アガンベンといったポスト構造主義的な主体議論と、フロイト/ラカンに代表される精神分析を、別個ではなく、統合するかたちで、新しい主体のあり方と暴力の関係、および社会システムの再考をおこなうつもりである。すなわち、フロイトの主体論を抜本的に再読し、加えてラカンの「性化の公式」に対する言明の変遷をさぐり、それと、フーコー/アガンベンの近代的な主体化/隷属化の議論をつなげていく。

(2)具体的には、性的差異をもとに、現実的および象徴的に配分されていた暴力が、性的差異の理論化で修正がなされたさいに、どのようなかたちで暴力が主体形成のなかに滑り込んでいくかの研究をおこなう。

(3)また、暴力は現実で行使されるのみならず、象徴的な正当性を与えられているので、人々の心理に大きな影響を与えるテキスト（映画などのポップカルチャーを含む文化テキスト）の表象分析をあわせておこなう。

(4)上記の点を有機的に結びつけ、理論的追求と文化研究の融合を図る。その点でも、グローバル化がアメリカ化の様相を呈しているなかで、日米の文化表象と流通の再検討をおこなう。

3. 研究の方法

(1)暴力と主体構築についての理論的追求なので、応募者

が個人としておこない、加えて、映像や報道表象を含む文化表象や文献の分析を、その理論の検証としてあわせて実行するので、それらの文献資料の収集と整理に人材を投与する。

(2)その成果は、学会誌などの学術論文に発表するとともに、学術的な公的雑誌や書籍にも発表する。また学術的な会議や講演などにおいても公表する。

4. 研究成果

研究の主な成果は、従来と異なった主体構成の理論の方向づけをおこなえたことである。具体的には、biopolitics の先鋭化したかたちと思われる現在のグローバル・レベルの監視社会のなかで、主体化/隷属化の図式が、他者殺傷を介する自己殺傷となって現れることに注意を喚起し、その理論化の端緒を開いた。これについては、以下に掲げる論考で論じたが、一般の読者向けには、2009年3月に岩波書店から出版された『壊れゆく世界と時代の課題』の第4章「言語と法、人間の領域——正義はどこにあるのか」のなかで、現在のわたしの関心事を表明する機会を与えられ、共同討議者たちの理解を得、生産的な対話をすることができた。また国外においては、2009年4月28日に米国カリフォルニア大学バークリー校でおこなった講演において、さらに立ち入った内容を発表し、同様の反応を得ることができた。

文化表象については、米国、韓国、日本など国内外の様々な発表媒体で研究成果を公表しており、その成果は順次、単行本化して、さらに公表範囲を広げることが予定されている。

本テーマの研究は、切迫性があると思われるので、2年をめぐり、まずもって上記の研究成果を出し、それを公表した後、それ以降は、現在のグローバル化をふまえて、文化的多様性のなかでの主体構築と暴力の問題を抜本的、総括的に分析して、国内外に発信する予定にしている。すでに今年4月に米国でおこない、続いて11月の米国での発表、および12月の台湾での Keynote speaker としての招聘講演が予定されている。

これまでの成果の具体的な事柄は以下。

(1) 理論的考察—国内外で頻発している従来とは異なつたかたちの暴力的事件や自傷行為などについて、現象的で社会的な見地ではなく、個人の心のありようの変化として、主体構築の再理論化を試みた。

①フーコー／アガンベンの主体理論の検証については、「死の政治学」という軸で再検討する作業をおこない、その成果は編著書『欲望・暴力のレジーム』、論文“Human/Inhuman: Death and Life in Biopolitics”またその口頭発表で公表した。具体的には「passion for (self-)killing」という概念が、今日的意味をもって、社会的・心的に現象化していることの意味を追及した。そのさい、アルグレイブの拷問や、日本の文脈では近年の生徒による生徒の殺傷や、家族のなかで発生する殺害などの心的構造に言及した。

②デリダの考察のなかで、ジェンダーの視点が脱構築においてどのような役割を負っているか、それが抑圧言説とどのような接点を持っているかを分析した(「デリダの贈与」)。

③アントニオ・ネグリのマルチュチュードについて、その考察に欠落していると思われるジェンダー視座を暴力の次元において論じた(「マルチュチュード／暴力／ジェンダー」)。

④現代世界を切り取る視角として「戦争の世紀」におけるフェミニズムの変容と役割を分析し(「『戦争の世紀』のフェミニズム」)、加えて現在のジェンダー平等概念と暴力との関係については「市民・欲望・暴力」で論じた。

⑤岩波書店から出版された『壊れゆく世界と時代の課題』の第4章「言語と法、人間の領域——正義はどこにあるのか」では、現在のわたしの関心事を表明する機会を与えられ、正義の再定義から人間概念の変容を語り、さらに今後の研究へと繋げた。

⑥暴力の変遷と性的差異の再理論化については、日本学術会議の『性差とは何か』で論じ、精神分析に特化して考察したものとしては、ジェンダー史学会に寄稿した「精神分析」、および岩波書店発行フロイト全集への寄稿としての「女性患者への恩義」で論じた。

(2) 文化表象分析においては、日米の映像表象や文学テク

ストを分析した。

①倫理・社会正義の観点から、現代的な戦争と個人主体の関係については、男同士のなかに展開する政治的・個人的な「friendship (友愛)」の言説を、ホモソーシャルの見地から、暴力の隠蔽として再理論化する試みをした。NASSS の招聘レスポンスとして、黒澤明監督の新日映画と日米安全保障条約および戦時下の抵抗運動と絡めて論じた(“Foreignness & Friendship: American Studies & Gender Studies”)。

②近年、従来の近代の枠組での帝国主義ではなく、グローバル化した帝国主義の結果として出現している新しいかたちの戦争・戦闘・テロリズムについては、「(不)可能な証言」の見地から、日本、米国、韓国の戦争映画を分析した(日韓シンポ「スクリーンからの手紙まどこに届くのか」)。

③暴力の対象となる身体について、その認識および感覚的把握の変化について、近年の映画のなかに見える女同士の関係に刻まれている暴力表象の変容を素材に、とくにbiopoliticsの見地から論じたものは、国際女性映画祭シンポジウムの招聘発表“Gaze and Bio-Death Politics”および梨花女子大学アジア女性センター春期レクチャーの招聘講演“Violence, Gender, & Narrative in the Post-Liberationist Age”。

④アメリカニズムのなかでこしまに込まれる知性・反知性の対立構造の展開を、さらに追求し、知性と反知性の風土の両方のなかで、いかなるジェンダーおよびセクシュアリティのレトリックが組み込まれているか、それがアメリカニズムの拡大のなかで、どのような変化を見せるかを考察し、論文として発表した(「ジェンダー・レトリックと反知性主義」)。

⑤生命と社会の再生産言説については、「<産性>から降りた女たち」というテーマで、文学・映画を題材に、中絶議論や再生産技術の考察をふくめ、身体認識と暴力について、表象の面から考察し、英文学会のシンポジウムで発表した。

⑥音楽のジェンダー解題については日本音楽学会全国大会シンポジウム「オペラとジェンダー」のレスポンスで、解剖学的性が音楽の歴史のなかで捏造されることに問題

提起し、またNathaniel Hawthorne 研究における政治や死の問題について考察した (“From Death to Life and Politics” や “Political Heat and Hawthorne”)。

(3) 理論的考察と文化表象分析の融合

①Biopolitics の権力発働が、具体的に文学表象に刻印されていることについては、従来そのように読まれてこなかった「バートルビー」を題材に考察し、合わせて、デリダ、ドゥルーズ、アガンベン、ネグリのバートルビー論との差異を考察した (“Biopolitics と Death Politics をまたぐ “Bartleby, the Scrivener”)。

②グローバル化における言説・流通・権力の関係について、翻訳の可能性の見地から論じたものは、コロンビア大学での招聘発表 “Politics, Translation, and Vulnerability” および G. Spivak との対話 “Response to Gayatri Spivak from a Theoretical Perspective”。

③ジュディス・バトラーとガヤトリ・スピヴァクがグローバル化における主権の問題を論じた対談を翻訳 (『国家を歌うのは誰か』) など。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び専攻研究者は下線)

(雑誌論文) (計13件)

①Kazuko Takemura, “Gaze and Bio-Death Politics,” *Women’s Bodies in the Age of Bio-tech*, pp. 69-79 (in English), pp. 80-89 (in Korean), 2008 in Korea (依頼論文)。

②Kazuko Takemura, “Foreignness and Friendship: American Studies and Gender Studies,” *Nanzan Review of American Studies Journal*, vol. 30, pp. 63-73, 2008, (依頼論文)。

③Kazuko Takemura, “From Death to Life and Politics,” *Newsletter*, NHSJ, vol. 27, pp. 10-11, 2009, (依頼論文)。

④竹村和子 「マルチチュード／暴力／ジェンダー」、『現代思想』第36巻5号、118-23頁、2008年 (依頼論文)。

⑤竹村和子 『戦争の世紀』のフェミニズム』『神奈川大学評論』第60号、76-83頁、2008年 (依頼論文)。

⑥竹村和子 「精神分析」『ジェンダー史学』4号、57-62頁、2008年 (査読あり)。

⑦Kazuko Takemura, “Human/Inhuman: Death and Life in Biopolitics,” *F-GENS Journal*, no. 10, pp. 52-57, 2008 (査読なし)。

⑧Kazuko Takemura, “Response to Gayatri Spivak from a Theoretical Perspective,” *F-GENS Journal*, no. 10, pp. 123-26, 2008 (査読なし)。

⑨Kazuko Takemura, “Political Heat and Hawthorne,” *Newsletter*, NHSJ, no. 26, pp. 6-10, 2008 (依頼論文)。

⑩竹村和子 「スクリーンからの手紙はどこに届くのか—日韓米の戦争映画とジェンダー言説」『文化表象の政治学—日韓女性史の再解釈』124-34 (日本語)、306-14頁 (韓国語訳) 2007年 (査読なし)。

⑪竹村和子 「デリダの贈与—脱構築／ポリティックス／ポスト性的差異」『環』13巻342-53頁、2007年 (依頼論文)。

⑫竹村和子 「暴力を思考すること、表象すること」『表象』1巻、79-81頁、2007年 (依頼論文)。

⑬竹村和子 「女性患者への恩義」『フロイト全集』第9巻月報6、6-9頁、2007年 (依頼論文)。

[学会発表] (計12件)

①Kazuko Takemura, “Foreignness and Friendship: American Studies & Gender Studies: Response to R. Chow, M. Mastanduno & J. Lee,” NASSS, July 26, 2008, at Nanzan University, in Nagoya (招聘)。

②Kazuko Takemura, “Violence, Gender, Narrative in the Post-Liberationist Age,” 2008 Spring Lecture Sessions at Asian Center for Woman’s Studies, April 17, 2008, at Ewha Woman’s University, in Seoul, Korea (招聘)。

③Kazuko Takemura, “Gaze and Bio-Death Politics,” 10th International Women’s Film Festival in Soul, April 5, 2008 at Ewha Woman’s University, in Seoul, Korea (招聘)。

④Kazuko Takemura, “Politics, Translation, and Vulnerability,” ICLS Annual Conference, March 27,

2008, at Columbia University in New York, USA (招聘)。

⑤竹村和子「マルチチュード/暴力/ジェンダー」アントニオ・ネグリ初来日記念企画 シンポジウム「アントニオ・ネグリ反逆する時代の知性」2008年2月8日、国際文化会館 (招聘)。

⑥竹村和子「人間と非人間—死をめぐる (バイオ) ポリティクス」COE 第4回全体会議「ポリティクスの分水嶺」2007年10月20日、お茶の水女子大学。

⑦竹村和子「オペラとジェンダー—コメント」日本音楽学会第59回全国大会シンポジウム「Voicing Gender」2007年9月29日、宮城学院大学 (招聘)。

⑧竹村和子「スクリーンからの手紙—どこに届くのか— 日韓米の戦争映画とジェンダー—言説」日韓女性会議『文化表象の政治学』2007年8月30日、お茶の水女子大学。

⑨竹村和子「市民・欲望・暴力—上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』への応答」東北大学創立100周年記念国際会議、2007年7月29日、東北大学 (招聘)。

⑩Kazuko Takemura, "Response to Gayatri Chakravorty Spivak," Gayatri Spivak Colloquium, July 14, 2007, お茶の水女子大学。

⑪竹村和子「産んで/産まないで (魔女) になる女と単性生殖」日本英文学会第79回大会シンポジウム、2007年5月19日、慶應大学。

⑫竹村和子「Biopolitics と Death Politics をまたぐ "Bartleby, the Scrivener"」日本アメリカ文学会中部支部第24回支部大会 特別講演、2007年4月22日、中京大学 (招聘)。

図書 (計7件)

①竹村和子 (編著)『欲望・暴力のレゾーム— 揺れる表象/格闘する理論』作品社、2008年、262頁。

②竹村和子/市野川容孝/小森陽一/守中高明 (分担執筆)『壊れゆく世界と時代の課題』岩波書店、2009年、231頁のなかの第4章「言語と法、人間の領域」(151-87頁)。

③竹村和子 (分担執筆)『反知性主義の帝国— アメリカ・文学・精神史』南雲堂、2008年、312頁のなかの第4章「ジェンダー・レトリックと反知性主義」(117-210 お

よび291-95頁)。

④竹村和子 (分担執筆)『性差とは何か—ジェンダー—研究と生物学の対話』日本学術協会の刊、2007年、311頁のなかの第2章3節「文学とジェンダー」および第2章4節「精神分析とジェンダー」(81-89および91-99頁)。

⑤竹村和子 (分担執筆)『ジェンダーの基礎理論と法』、東北大学出版局、2007年、395頁のなかの第13章「フェミニズムの思想を稼働しつづけるもの」(247-66頁)。

⑥竹村和子 (分担執筆)『世界のジェンダー平等—理論と政策の架橋をめざして』東北大学出版局、2007年、430頁のなかの第2章「市民・欲望・暴力—上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』への応答」(73-76頁)。

⑦竹村和子 (翻訳) J・バトラー/G・スピヴァク『国家を歌うのは誰か?—グローバル・ステイトにおける言語・政治・帰属』岩波書店、2009年、107頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹村 和子 (TAKEMURA, KAZUKO)

お茶の水女子大学

大学院人間文化創成科学研究科・教授

研究者番号: 10155046

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし